

## **Empathic embarrassment: Situational and personal determinants of reactions to the embarrassment of another.**

**共感的当惑: 他者の当惑への反応を決める状況・個人的要因について**

Miller, R. S. (1987). Empathic embarrassment: Situational and personal determinants of reactions to the embarrassment of another. *JPSP*, 53(6), 1061-1069.

Rep. 小森めぐみ<sup>1</sup>.

### **ABSTRACT**

行為者が感じている当惑に観察者がどのように反応するかが二つの実験で検討された。はじめの実験では、行為者と観察者の事前の相互作用の性質（協力的・競争的・独立）と観察者の観察のしかた（共感的・客観的）が操作された。観察者の自己報告と皮膚電位を測定したところ、共感的な観察を行った場合は、事前の相互作用の質に関係なく、観察者の置かれた苦境への反応が増加していた。さらに、独立・共感条件に置かれた参加者は、共感的当惑と考えられる反応を報告した。これは自分自身の社会的アイデンティティが脅威に置かれていない状況でさえ生じる、他者に対して生じる当惑である。次の実験では当惑を感じやすい参加者が共感的当惑をもっとも感じやすいことがわかった。これらの結果は社会的な当惑を頑健で包括的な現象であるとともに、感じやすさには個人差があることを示している。共感的当惑の起源として考えられるもの、また、知覚、相互作用、パーソナリティがつながりあって共感的当惑に影響しているという考察が行われた。

### **当惑とは**

- 当惑とは、個人の社会的アイデンティティが望ましくない出来事によって公的に脅かされる場合に生じる、望ましくない状態(Goffman, 1956)。
- 人々は出来れば当惑を避けたいと願っているし(e. g., Brown, 1970)、当惑を感じた場合にはすぐにそこから回復しようとする(Apsler, 1975; Modigliani, 1971)。
- 本研究では、共感的当惑の存在を主張する。そして、共感的当惑に相互作用の質や個人差が与える影響を検討する。

### **Embarrassing Circumstances.**

#### **当惑はいつ生じるか**

- Goffman(1956)は、一貫していて望ましく、適切な社会的アイデンティティ維持しそこなった、混乱した相互作用が当惑を引き起こすと主張した。
- 当惑の原因としては、個人が目の前にいる観客に投影している印象管理の懸念(Goffman, 1956)、アイデンティティ、バランス、自信の崩壊(Gross & Stone, 1964)、単に目立つことや過度の賞賛(これらは、相手にとってどうかという情報がない)(Buss, 1980)があげられてきた
- どの場合でも、当惑のルーツは自分の社会的アイデンティティへの配慮

#### **当惑への対処**

- Apsler(1975)の行った実験では、当惑を感じている参加者のほうがそうでない参加者よりも後続の課題で援助行動を多く行った。ただし、援助行動の対象が自分が当惑する状況に置かれたことを知っているかどうかは、援助行動に影響していなかった。
- これは当惑が、自分の公的イメージを回復するために社会的賞賛を得ようと動機付ける感情であるというだけでなく、もっと頑健に社会的行動に影響するものであることを示している。

### **共感的当惑**

- Buss(1980)は、私たちが当惑についてよく知っており、それをひどく恐れているために、たとえ自分の社会的アイデンティティが実際に脅かされない場合でも、当惑を引き起こすような状況について知っていることだけでも気に障ると述べている。
- ならば、自分が置かれた状況だけでなく、他者の置かれた状況も当惑を引き起こす可能性がある。

## **Empathic Responses.**

### **他者の感情への感情反応**

- 多くの研究で、私たちが他者の感情に影響されることが示されている
- Gruen and Mendelsohn(1986)は共感（他者の感情の共有）と同情（他者の苦境に対する配慮と思いやり）を区別している。二つは相関関係にあり、状況・個人差の影響を受けることがわかっている
- 他者の感情的経験への感情的な反応は行為者に対する観察者の視点、認知的評価、同一化の程度に応じて異なる
- Davis(1983)は共感、同情する傾向に個人差があることを指摘
- Gruen and Mendelsohn(1986)の行った区別は、私たちが他者の当惑に対して憐憫だけでなく当惑も感じうることを裏付けている

## **Empathic Embarrassment: A conceptualization.**

### **共感的当惑とは**

- 当惑の表出（アイコンタクトの機会の減少、笑顔の増加、落ち着かない姿勢、どもり）は明確であるので(Edelmann & Hampson, 1981)、読み取りは容易。よって、観察者は行為者の行為者の当惑を読み取り、それを共感的に共有するだろう。
- 表出が曖昧である場合も、観察者が行為者の置かれた苦境に自分が置かれた場合を想像できれば共感的な当惑が生じるだろう。
- 共感的当惑は、自分自身を当惑させるような経験の後に生じる古典的に条件付けられた感情的反応の一般化の結果といえる。

### **共感的当惑に影響する要因**

- 観察者の共感的当惑には様々な状況的・個人的要因が影響すると考えられる
  - 行為者との相互作用の経験、馴染み深さ、行為者自身の当惑
  - 行為者の不快感や、行為者の表出に観察者が注意する程度
- 行為者の当惑をより明確にさせる要因はなんでも共感的当惑を強めるだろう。

### **本研究の概要**

- 行為者の当惑に観察者がどのように反応するかを検討
- 行為者と観察者のつながり（最初の課題で競争 or 協力 or 独立）、観察者が行為者をどのように観

---

<sup>1</sup> 一橋大学大学院博士課程.

察するか（感情に注目 or 動作に注目）を操作

- ・ 行為者と競争・協力した観察者は関係をもたなかった独立の観察者よりも共感的当惑を感じるこ  
とが予想される
- ・ 相手と何も関係のない条件の参加者が行為者の感情に注目した場合（すなわち独立・共感条件）  
に観察者が行為者の当惑を共有した場合には、共感的当惑が生じていると考えられる。

## Experiment 1

### 方法

#### Participants

- ・ 各 84 名の男女が単位の追加点と引き換えに実験に参加。パフォーマンスを拒否した参加者のいる  
ペア 3 組（ペナルティーは特にない）が除外された。

#### 実験デザイン

- ・ 相互作用 3 × 役割 2 × 知覚セット 2 × 性別 2 + 統制（すべて被験者間）

#### Procedure

- ・ 参加者は同性ペアで実験に参加した。実験は“印象形成が変化していく際の生理的変化”を調べ  
るものだと説明された。短い課題をしてもらった後、ペアの片方がもう片方の前で様々な課題を  
してもらい、見ている側の生理的変化を測定すると教示された。
- ・ 手続きに同意してもらった後、参加者ペアは Wolosin, Sheman, and Till (1973) をモデルとした  
課題（12 個のあそびを状況に応じて選択するもの）に回答した。参加者は自分のペースで回答  
し、後で得点が知らされると教示された。

#### 操作

- ・ 参加者ペアは以下の 3 つの相互作用の条件にランダム配置された。
  - 協力条件：相手と同じ回答をすることで高得点が得られる。
  - 競争条件：相手の回答をあてると高得点が得られる。（この場合、参加者は半数ずつあてる  
役とあてられる役を行った）
  - 独立条件：他の学生が答えるように答え、相手とは無関係に得点がもらえる。
- ・ その後、参加者はコインの表裏で行為者役/観察者役に割り当てられた。
  - 観察者はマジックミラーで行為者を観察した。その際、以下の教示が加えられた
    - ◇ 共感条件：行為者の感情を描き、視覚化する
    - ◇ 客観条件：行為者の行動、姿勢、動きを観察する
  - 行為者は封筒から一枚紙をひいて、そこに書いてあった恥ずかしいパフォーマンスを行った
    - ◇ ロックにあわせて 1 分間踊る、国家を歌う、ジョークを聞いたあとのように 30 秒笑う、  
駄々をこねる 5 歳児のマネをする
- ・ 14 名の offset の参加者が統制群として当惑を感じないようなパフォーマンス（音楽をきいて歌  
詞をうつす）を行った

#### 従属測定

- ・ 観察者の皮膚電位と行為者観察者両方の感情報告（形容詞、19 件法の当惑評定）。観察者は行為  
者が感じていたであろう当惑と行為者への同情も同様の測定で回答。

## 結果

### 行為者の当惑

- ・ 行為者が回答した形容詞、当惑の尺度に対して Dunnet' s test を実施した結果、行為者の当惑は当惑条件のほうが統制条件よりも高かった ( $M=11.5$  vs.  $M=4.9$ )。

### 観察者の反応

- ・ 観察者の反応に対して相互作用×知覚方法×性別の ANOVA が実施された。

### 行為者の当惑の知覚

- ・ Dunnet' s test の結果 (TABLE 1)、観察者から見た行為者の当惑は、当惑条件のほうが統制群よりも高かった ( $M=11.2$  vs.  $M=6.4$ )。しかし、独立+観察条件のみ統制群と差が見られなかった。
- ・ 教示の主効果が見られ、共感条件は客観条件よりも行為者が当惑していると評定していた ( $M=12.3$  vs.  $M=10.1$ ,  $F(1, 58)=5.47$ ,  $p<.03$ )。

### 当惑・同情の自己報告(形容詞も当惑 19 件法も同様の結果だったので、形容詞のみ報告)

- ・ 観察者自身の当惑に対して ANOVA を実施した (TABLE 2)。
- ・ 性別の主効果が見られたが ( $F(1, 58)=6.19$ ,  $p<.02$ )、これは相互作用×知覚方法×性別の交互作用に制限されていた ( $F(2, 58)=5.11$ ,  $p<.01$ )。
  - 女性参加者 ( $M=4.4$ ) は男性参加者 ( $M=3.5$ ) よりも当惑を感じていたが、競争条件でのみその反応が異なっていた。
  - 単純効果検定の結果、女性は競争条件よりも協力条件で強く当惑しており ( $F(2, 58)=3.17$ ,  $p<.05$ )、男性は協力条件よりも競争条件で強く当惑していた。
  - また、競争条件に置かれた女性の場合は当惑の程度は共感>客観だったが ( $F(1, 58)=7.44$ ,  $p<.01$ )、競争条件に置かれた男性の場合は当惑の程度は客観>共感だった ( $F(1, 58)=4.57$ ,  $p<.04$ )
- ・ 競争条件の結果は予想していたよりも複雑なものだったが、ネガティブと思われる競争的なリンクであっても、観察者は行為者の行動に影響されることがわかった。
- ・ また、統制群との比較を実施したところ、性別にかかわらず、共感方法で観察した観察者は統制群よりも高い当惑を報告した。関係が全くないにもかかわらず、共感方法をとると当惑が高まっていた。
- ・ ただし、sorry や sympathetic という形容詞も同じ交互作用がでていた ( $F(2, 58)=6.84$ ,  $p<.001$ ;  $F(2, 58)=4.48$ ,  $p<.02$ )。これらに共感的当惑を加えた 3 つは、どれかが支配的な感情であるわけではなく、同時生起しているように思われる。

### 皮膚電位の結果

- ・ 30 秒スパンで 4 mV を越えた回数を測定し、全測定の平均を算出し、同様の分析を行った (TABLE 3)。
- ・ 相互作用の主効果が見られた ( $F(2, 58)=3.52$ ,  $p<.05$ )。Duncan' s test の結果、協力条件 ( $M=5.2$ ) は他二つの条件よりも有意に回数が多かった。競争条件の回数 ( $M=3.8$ ) も独立条件の回数 ( $M=2.9$ ) よりも多かったが、これは有意な差ではなかった。
- ・ 統制群との比較を実施したところ、統制群との有意差が見られなかったのは独立+客観条件のみだった。これは、何らかのリンクがなければ喚起は起こらないことを示している

## 相関係数の算出

- ・ 各条件ごとに級内相関を算出し、比較した (TABLE 4)。
- ・ その結果、観察者による行為者の当感知覚評定は、観察者自身の当惑、sorry、sympathy と有意に強く相関していた。
- ・ 皮膚電位と有意に相関していたのは、自己報告の当惑のみだった。また、皮膚電位と当惑の相関係数は皮膚電位と sorry、sympathy の相関係数よりも有意に大きかった ( $t(60)=2.29$ ,  $p<.05$ )

## 行為者と観察者の比較

- ・ 役割を考慮した分析を行った結果、行為者 ( $M=3.9$ ) は観察者 ( $M=5.9$ ) よりも当惑が弱く ( $F(1, 127)=57.07$ )、男性 ( $M=4.5$ ) は女性 ( $M=5.4$ ) よりも当惑が高かった ( $F(1, 127)=14.14$ ,  $p<.01$ )。

## 考察

### 結果のまとめ

- ・ 独立+共感条件の観察者は、統制群の行為者を観察したときよりも当惑している行為者をみたときに個人的な当惑を感じていた。
- ・ 個人的当惑は sorry や sympathy と相関しているものの、皮膚電位と唯一相関していた。
- ・ このことから、彼らを感じていた当惑は共感的当惑だといえる。
- ・ 他者の当惑行動が自分のアイデンティティにも脅威を与えていたのかもしれない。しかしこの可能性は薄い。
  - 独立+共感条件の参加者は、行為者と関係がなく独立性を守っていたのに (皮膚電位の反応は他の条件と比べて低い)、当惑を感じていた。
- ・ 知覚方法や関係の種類も共感的当惑に影響していた。行為者の苦境が明確になるほど反応が大きい傾向であるといえるだろう。

### 個人的傾向と共感的当惑

- ・ 共感的特性 (Davis, 1983) やノンバーバル手がかり解読のうまさ (Hall, 1978) も結果に影響するだろう
- ・ 共感的当惑という名前は観察者が行為者の外的手がかりに反応しているように見えるが、知覚方法によって当惑の程度に差があることは、共感的当惑がノンバーバル手がかりの読み取り依存でない可能性も指摘している。
- ・ つまり、行為者が不適切にふるまっている状況での規範に観察者が familiarity をもっている場合には、行為者の表出に関係なく共感的当惑が生じる可能性がある。

### 実験2にむけて

- ・ 共感的当惑に影響する要因として、観察者自身がふだんの程度当惑を感じやすいかがあげられる。Modigliani (1968) は当惑しやすさの個人差を測定する尺度を開発した。これは否定的評価への恐れや低自尊心によって予測されることがわかっている (Miller, 1987)
- ・ 共感する能力の高低にかかわらず、個人的に当惑を感じやすい人は他者の悲劇にも反応しやすく、共感的当惑を感じやすいだろう。実験2ではこの点を検討する

- ・ 実験1では、競争条件での反応は低い皮膚電位であったものの、パターンに性差が見られた。ライバルの当惑は興味深いトピックといえる。実験2では競争をより顕現的にして再度検討する

## Experiment 2 : Dancing

### 概要と目的

- ・ 実験2では相互作用を囚人のジレンマゲームにして、相手の反応のしかたを操作した。また、当惑しやすさの個人差を事前に測定し、その影響も検討した。

### 方法

#### Participants

- ・ 男女各76名の大学生が単位の追加点として実験に参加した。4ペアが除外された。

#### 実験デザイン

- ・ 実験デザインは当惑しやすさ2×相互作用2×役割2×性別2。統制群はなし

#### Procedure

- ・ 授業時間内に Modigliani (1968) の当惑尺度 (26 項目 5 件法) が実施され、中央値 (40) 折半された。
- ・ 手続きは実験1とほぼ同様。
- ・ 相互作用は囚人のジレンマゲームが用いられた (相手の反応は架空のもの)。
  - 協力条件: 相手は10回中1回だけ裏切った
  - 競争条件: 相手は10回中7回裏切った
- ・ 観察者の知覚方法は共感的なもののみを用いた。従属測度は実験1と同じ。

### 結果

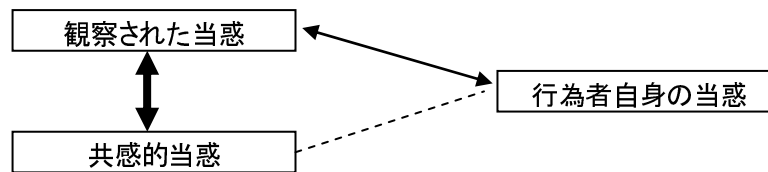
#### 行為者と観察者の比較

- ・ 形容詞の評定に対し、上記のANOVAを実施した (TABLE 5)。
- ・ 役割の主効果 ( $F(1, 126)=29.45, p<.001$ )、個人差の主効果 ( $F(1, 126)=32.04, p<.001$ )、交互作用 ( $F(1, 126)=5.46, p<.05$ ) が有意だった。
  - 観察者の当惑は行為者自身の当惑よりも弱かった。
  - 観察者の場合も ( $F(1, 138)=6.35, p<.02$ ) 行為者の場合も ( $F(1, 138)=42.12, p<.001$ )、当惑しやすい人は当惑しにくい人よりも当惑を強く感じた。
  - 単純主効果はすべての条件間で有意だった。
- ・ 行為者の当惑と当惑しやすさの相関 ( $r=.26, p<.05$ ) よりも、観察者の共感的当惑と当惑しやすさの相関 ( $r=.54, p<.01$ ) のほうが強かった ( $t(68)=2.42, p<.01$ )。

#### 相関

- ・ 行為者自身の当惑、観察者から見た行為者の当惑 (観察された当惑)、共感的当惑の相関を検討
- ・ その結果、共感的当惑は観察者から見た行為者の当惑と強く相関していた ( $r=.56, p<.001$ )。行

為者自身の当惑と観察者から見た行為者の当惑の相関は弱く ( $r=0.323$ ,  $p<.05$ )、行為者自身の当惑と観察者の共感的当惑の間に有意な相関は見られなかった ( $r=.05$ , ns.)。



### 観察者の反応

- ・ 観察者にだけ尋ねられた項目に対し、同様の分析を行った。
- ・ フィラーにあわせて尋ねた印象評定項目では協力条件 ( $M=7.3$ ) のほうが競争条件 ( $M=6.3$ ) よりも行為者をポジティブに評価していた ( $F(1, 68)=9.14$ ,  $p<.01$ )。
- ・ 皮膚電位に対し、個人差の主効果が見られた ( $F(1, 68)=8.70$ ,  $p<.01$ )。当惑しやすさが高い ( $M=7.2$ ) ほうが低い方 ( $M=5.0$ ) よりも反応回数が多かった。
- ・ 協力条件のほうが ( $M=6.5$ ) 競争条件よりも ( $M=5.0$ ) よりも反応回数が多かったが有意ではなかった ( $p<.08$ )。

### 考察

- ・ 共感的当惑には個人の当惑しやすさの違いが大きく影響していた。
- ・ 行為者の当惑しやすさと当惑のつながりよりも、観察者の当惑しやすさと共感的当惑のつながりのほうが強かった。これは、共感的当惑では実際の当惑よりも状況の効果がマイルドになるためかもしれない。
- ・ 相互作用の質は相手の評価に影響したものの、共感的当惑には影響していなかった。過去に競争したことは、共感的当惑に影響していなかった。

## GENERAL DISCUSSION

### 結果のまとめ

- ・ 共感的当惑がデモンストレートされた。
- ・ 共感的当惑は、実際に行為者が感じている当惑から直接影響を受けるのではなく、観察者が判断した行為者の当惑に影響されていた。
- ・ 相互作用の有無は共感的当惑に影響していたが、相互作用の質は影響していなかった。
- ・ 特性としての当惑の感じやすさも共感的当惑の影響を受けていた。
- ・ 本研究は、当惑が個人の社会的アイデンティティを必ずしも必要としないことを示している。
- ・ ある人が当惑を感じることは、相互作用の崩壊という形だけではなく、共感的当惑の形でもまわりにいる人に影響を与える。
- ・ この現象をより詳しく知るためには、私たちがどのように社会化を進めていくのかを検討する必要があるだろう。共感的当惑は文化化(enculturation)の進展にしたがって強まることはまちがいない。